

名訳完成

シリーズ・日本人と聖書
第8回

幻の名訳

- 「明治元訳」の改訳を望む声
 - 宣教師・漢訳の影響・文体など
- 警醒社書店が改訳を試みる(1905年)
 - 委員：内村鑑三・植村正久・小崎弘道・柏井園
- 内村鑑三は早くから共同作業に不満を訴え、何度も辞意を表明。翌年辞退。
- 翻訳委員会は空中分解し「幻の名訳」に！

改訳委員会発足

- 「福音同盟会」で改訳の特別委員を選定
 - 本多庸一・星野光多に委嘱。宣教師・米英聖書教会との折衝、改訳委員の選定
- 「教会同盟」発足（明治39年）の時、グリーンが邦人による改訳を求めた
- 翻訳委員会第一回会合（明治43年）
 - グリーン・ダンロップ・フォス・別所梅之助・松山高吉（グリーンと松山は明治元訳の経験者）

改訳の方針

1. 平易通俗にして口語に近い
2. 用語は新旧を問わず広く通じやすいもの
3. 神及びキリストに敬語を用いる
4. 「かれ」「なんじ」などの代名詞を省く
5. 「語訳にあらずして翻訳たるべく日本語の他国文ならずして日本語の日本文たるべき事」

翻訳作業

- 原典・参考文献

- ギリシャ語の原典はネストレ(版は不明)
- 英語訳は「改訂訳」Revised Versionを参考

- 翻訳作業

- 下訳(個人)→小委員会→全体会議
- 訳語の変更(「みつぎとり」を「取税人」など)
- 漢語に無理なルビをふったものを解消

マタイ6章29・34節

「われ爾曹(なんじら)に告んソロモンの栄華の極(きわみ)の時だにも其装(よそほひ)この花の一に及(しか)ざりき。是故(このゆえ)に明日の事を憂慮(おもひわずらふ)なかれ明日は明日の事を思ひわづらへ」 <明治元訳>

「然(さ)れど我なんぢらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装(よそほひ)この花の一つも及(しか)ざりき。この故にあすのことを思い煩うな、明日は明日みづから思ひ煩はん。」 <大正改訳>

「成った」のか「造られた」のか

- ウィンライトの指摘(「神学評論」1918年)
- ヨハネ1章3節
 - 「万の物これに由りて成り」<大正改訳>
 - 「万物これに由て造らる」<明治元訳>
- 英訳ではすべて「造る」(made)である
- 日本語の「成る」は状態の変化を表す
- 丸山眞男の指摘
 - 日本の古事記、日本書紀では「なる」が基調

その後の翻訳

[口語]

「すべてのものは、これによってできた。」

[新改]

「すべてのものは、この方によって造られた。」

[新共同]

「万物は言によって成った。」

聖句の成句化

- 「人の生くるはパンのみに由るにあらず」
- 「目には目を、歯には歯を」
– 「目にて目を償ひ歯にて歯を償へと…」／元訳
- 「人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ」
- 「一日の苦勞は一日にて足れり」
- 「真珠を豚の前に投ぐな」
- 「求めよ、然らば与へられん」「迷える小羊」
- 「狭き門より入れ」「目より鱗」 などなど